

I

保育の実践現場 に立つとき

- 1 保育の実践現場で保育に出会う
- 2 保育施設の特徴とその役割
- 3 広がる子育て支援と保護者の役割
- 4 家庭・保護者を支援すること
- 5 子育て支援は子育て支援

門戸を開く保育実践現場

幼稚園・保育所・認定こども園などの保育実践の場は、多くの人々にその場を開いています。将来、母親や父親になるであろう中学生や高校生に、また保育を学び保育実習に出る保育学生にも、そして余力を活かして保育サポートをしたいと思っている人々にも…。

なぜ、そのように若者から中高年者までを受け入れるのでしょうか。今日の社会状況と関連して、その理由を考えてみましょう。

(1) 多様な人が出入りする保育実践現場

その第1の理由は、青少年に子どもの世話をしようとする“親性”や幼な子を労わろうとする“養護性”を培っていく必要性があるからです。少子化が進んだ今日では、兄、姉として幼い弟妹の面倒をみたり、近所の年下の子たちと触れ合って遊ぶ体験ができにくい状況が出現しています。幼な子の愛らしさや思い通りにはならない大変さを体感するためには、幼い子ども達と触れ合う場が不可欠です。保育所や幼稚園、子育て広場などでは、幼な子との触れ合いを体験してもらうために、小学生・中学生・高校生が遊びに来ることを歓迎しています（「乳幼児と中高生のふれあい事業」実施）。

第2の理由は、幼稚園や保育所などは、将来保育者を志す保育学生に、実習を通して学ぶ場を提供する役割を担っているからです。保育士資格をとる保育学生には、保育所と児童福祉施設での実習が、幼稚園教諭免許状を取得する保育学生には幼稚園実習が必修単位として課せられています。やがて認定こども園には、両方の資格と免許を有する「保育教諭」が創立されます。毎年、大勢の保育学生が実習に訪ずれ、保育者たちの指導を仰いでいます。

第3には、子育て支援策の一環として、あちらこちらで保育サポーター養成が行われています。家庭保育、ベビーシッター、子育てひろば、学童指導員など、無資格であっても乳幼児や学童の傍らにいてくれる多様な人々を必要とする社会が到来しているからです。

以上の理由から、必要とされればさまざまな年齢階層の人たちに門戸を開いて受け入れ、保育の実際を体験できる場を提供しています。

(2) 部外者を受け入れるメリット・デメリット

このような各種各層の人々を受け入れることによって、保育の場は外に向かって開かれたものとなります。保育者は、単に幼な子の保育だけに止まらず、さまざまな人々を受け入れ、保育体験の場を提供し、子どもへの理解や保育への理解を図ることによって、保育者としての社会的力量を磨くというメリットがあります。

また子ども達も中学生や高校生を、身近な頼もしいお兄さん・お姉さんととらえ、楽しく交わる体験やゆったりとした優しさに触れる機会をもつことが出来ます。

しかし一度に大勢の部外者を受け入れると、保育の日常性が失われて、子どもたちは落ち着きがなくなり、通常の保育が出来なくなるなど、思わぬデメリットを負うこととなります。

ボランティアや実習生として実践現場に立つとき

幼稚園も保育所も子育てひろばも、全般的に、低年齢の子どもが増加しています。また一時保育の広がりもあり、助けの手がいくらあっても十分過ぎることはありません。そのためボランティアなどでお手伝いをしてくれる人々を“歓迎するムード”があるのも事実です。

(1) 素直に保育実践の場に身を置いてみる

幼い子どもにかかわることに戸惑い、苦手意識をもつ人は決して少なくありません。保育を志す学生さんの中にも、なんと言って話しかけたらよいか分からない、子どもの前で咄嗟に言葉が出てこない、どう遊んだらよいか分からない…と、硬くなってしまいう人も結構いるものです。

普段、接していない者には、接して慣れていくほか、手段はありません。深呼吸をして肩の力を抜き、素直に保育実践の場に身を置いてみましょう。あなたに対して、「おやっ？」とした表情を見せる子ども、距離を置いて遠巻きに見つめる子どももいます。そこでめげないで、楽しそうな表情で子どもたちを見守っていると、ひとり、ふたりと、近寄って来てくれる子どもが出てきます。あなたに興味・関心を向け始めた子どもたちです。その子たち